
Demon Slayer

赤翼 真之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Demon Slayer

【Nコード】

N6021P

【作者名】

赤翼 真之助

【あらすじ】

3つの大陸で構成される惑星テズラエア。

それぞれが様々な文化を持ち、生きている。

しかし近年、影のように黒く人を喰らう悪魔がこの惑星に出没している。

人はそれをデーモンと呼ぶ。

そんな恐怖と不安が渦巻く世界で孤児院出身の青年、アシュレイは剣術を学ぶべく戦闘技術専門の学園、レイウス学園へと入学するのだが……。

デーモンの襲来、そして隠された能力と過去。

儚く、残酷な真実を紐解く物語……。

プロローグ

天歴2510年。

テズラエアと呼ばれる惑星に人は天歴を刻み始めた時から生きている。

このテズラエアは細かな国という細分化はされておらず、おおまかに3つの大陸に分類されている。

大陸の中で一番陸地が大きく、自然に恵まれたラバハル大陸。

原始民族が多く残るこの地では、多種多彩な文化が入り交じっている。民族間紛争は絶えないが、現在は平和統制が取られているので大きな争いは起こらない。

魔術に長けた近未来的文化を持つサラド大陸。

3つの大陸では随一の魔術文化を誇る。

魔導列車や飛空艇などの世界的に普及されている交通機関はサラドからの文化である。

その2つに挟まれるように位置する交易、武術が盛んなリシャール大陸。

ラバハルとサラドの間に位置することあつて、リシャールを経由しての流通が基本構造となっている。

また、人が行き交うリシャールには戦闘技術を専門に扱うレイウス学園がある。

今回の物語の舞台はリシャール大陸のレイウス学園から始まる。

近年、世界各地でデーモンと呼ばれる黒い身体を持った生物が出没

している。

デーモンと呼び名は一括りだが、獣のような四足歩行のものや、翼を持ったものもいる。

最近では知能を持ったものまで出現したという報告も出ている。ただ奴らは人間を喰らい、殺す。

いわば人類の敵である。

デーモンは次元の裂け目から来ると言われているが真相は不明。

日々、増える被害に歯止めをかけるべく立ち上がったリシャール南部の辺境の村に住む青年、アシュレイ。

孤児だった彼は強くなってこの地に戻り、自分を育ててくれた孤児院の院長やそこに住む孤児達を守ることを決意した。

決意の夜明け

リシャル南部に位置する自然に囲まれ、自然と共存する辺境の村
リビテア。

夜明け前、まだ星が見える空の下、その村の門前に二人の人が立っていた。

「アシュレイ、本当に行くのかい？」

長い白髪を束ねた優しい面もちの老婆が不安げな表情をして肩まで伸びた赤い髪の男に問いかける。

「ああ。ちゃんとこの村を守るように強くなつて帰ってくるから」
「そう……くれぐれも無茶はしないように。それから向こうに着いたら手紙はちゃんと書くこと。あの子達も書くっていったからね」
「アリシアさん、言われなくても分かってるよ。」

アリシアと呼ばれた老婆が言ったあの子とは六人の孤児のことである。アリシアは孤児達の育ての親で、アシュレイもその一人だ。赤い髪の男、アシュレイはアリシアに言葉に出来ないくらい感謝の気持ちを持っている。

孤児で森の中に捨てられていた自分をここまで育ててくれたのだから。

「そろそろ出ないと列車に間に合わなくなるから行くね」

「しばらく寂しくなるけど、行つてらっしゃい。ここはあなたの故郷、いつでも戻ってきていいからね」

アシュレイは元気良くうなずいて村の門に背を向けた。

その時、「アシュレイ！」と若い女性の声が村の中から聞こえた。

もう一度、振り返ると銀髪のロングヘアーで綺麗な顔立ちの女性が走って門の前にやって来た。

彼女の名はエミリア。アリシアの孫でアシュレイとは幼なじみである。

「駅まで送っていくね」

「エミリア……ありがとう」

エミリアはどこか神妙な面もちでアシュレイを見つめて言う。
そして二人は村に背を向けて歩きだした。

朝日と君とこの場所で

まだ夜も明けない木々に囲まれた一本道を二人は歩く。見上げればパープルの空に輝く星々。

沈みきつた冷たい空気を切りながら、二人は黙々と歩いている。

「レイウス学園ってどんなところなの？」

「実際のところ、俺もよく知らないんだ。村の掲示板に学園の案内が書いてあって、それを見て志願書を送っただけだから」

「そっか。良いところだといいね」

「うん」

リビテアに住む人がリシャルの中枢に位置するレイウス区域に行くことは滅多にない。

片道七時間。魔導列車に揺られるのだ。

列車を使ってもせいぜい東隣の漁村　ベザールへ魚を買いに行くくらいである。

そんな未知の世界にアシュレイは期待半分、不安半分を抱いて赴く。

そんな他愛のない話をしているとあつと言つ間に林道を抜け、遮るものがない緑一面の平原　ブラムス平原へと出た。

ここまでくれば列車の駅は目前。

「太陽、出てきたな」とアシュレイは正面の赤みがかかった朝日の頂点を見て呟いた。

エミリアは無言でうなずくだけ。何も言わず、正面の朝日に目を細めている。

二人の身体を風が音を立てて吹き抜けた。

別れ。

永遠の別れでもないのに何処か虚しくて言葉にならない。当たり前が当たり前でなくなる瞬間、何かが音を立てて崩れる。そんな感情がエミリアの心で渦巻いていた。

緑の絨毯を歩き、不似合いな鉄の箱を目指すがその足取りは重い。

だが、程なく駅のホームに到着した。

アシュレイは乗車券を購入し、一両の列車の前に立ってエミリアの方へと向きなおる。

「なんて顔してるんだよエミリア。可愛い顔が台無しだぞ？」
うつむくエミリアの頬に手を当てる。

「バカ……。ちゃんと手紙書くからね？」

「うん。楽しみにしてるよ」

ルルルルルルルル。

列車が発発する合図だ。

「それじゃあ、俺行くな」

「あ、アシュレイ……」

ふとエミリアは列車に乗り込もうとするアシュレイを呼び止めた。

「……………なんでもないや。行つてらっしゃい！」

「おう！」

手で合図をして、アシュレイは列車に乗り込んだ。

見かけは鉄の箱だが、内装は木がベースと凝ったデザインになっている。アシュレイはエミリアの顔が見える窓際の席に座り、窓を開けた。

汽笛が鳴り、列車は振動と共に動き出す。

「早く帰ってきてね！」

エミリアの列車の音に負けない声にアシュレイは「出来るだけな」と返した。

列車は少しずつ駅から離れる。目的地へ向かう。

列車が見えなくなるまで、エミリアは見つめていた。

「バカ……」

人と人と

流れるように景色が移り変わる。

平原を抜け、大きな川をいくつも越え、トンネルを入ったり出たり。トンネルに入った時に窓に写る自分の顔が不安そうにしているのが分かった。青い瞳、高い鼻、整った眉、容姿については周りの人間の反応などを見ると、アシュレイ自身も悪くはないと心で思っているが不安そうな今の顔は決してカッコよくない。

しみやかな反面、寂しさや孤独が待っているのかと思うと、重いため息が出る。前の座席に置いた大きな革のカバンを開けてアリシアが作ってくれたペレーチェと呼ばれる木の実から作るお菓子を取り出した。

ペレーチェは様々な木の実をペースト状にして棒に刺し、直火で炙った伝統のお菓子だ。

作る人によって木の実の使用比率や形成、焼き加減まで違う為、家庭によってまったく味が違うのが特徴。

アシュレイは子供向けに甘い果実を多く使ったアリシアさんのペレーチェが一番好きだった。またそんな事を言えばエミリアが怒って苦い木の実ばかり使ったペレーチェらしきモノを差し出してくるだろう。

一人、そんな事を考えながらアリシアのペレーチェを食べていた。

移ろう景色も若干変わり、自然から街、街から都会へと移行してきた。最初は一両しか無かった車両も大きな駅に止まる度に多くなっていく。

ハツシユヤード駅と呼ばれる場所で人は一気に多くなり、急に窮屈になった。

そんな時、鉄の鎧をまとった騎士らしき大男がアシュレイの前に座った。男は肩に少しかかるくらいのストレートの金髪で、腕が丸太のように太く、頬には無数の切り傷があり、身長は軽く180センチを越えるかなりのガタイをしている。

そんな男は鞘に入った剣を抱えており、刃渡り150センチ程、刃の厚さ5センチ程の馬鹿デカイ大剣で、身体にもたれかけるように持っていた。

「悪いな。カバンどけてもらって」

「いえいえ」

アシュレイは体格だけでおののいてしまい、あまり目を合わさないように膝に乗せたカバンを漁ったり、レイウス学園の案内を開いたりしていた。が、それが逆に金髪の男に話しかけられるタネとなっていた。

「兄ちゃんレイウス学園に入学するのか？」

「えっ……」突然の大男の言葉に不意を突かれ、返事が出来なかった。

「ほら、レイウス学園のパンフレット持ってるからそうなんじゃないかと思ったんだけど違った？」

「あ……そうです。」

「やつぱそうかー。実はさ、俺もレイウス学園の学生なんだよなー」

「えっ!？」

アシュレイは大きく目を見開いて男の目をマジマジと見た。男はまたこの反応かと言わんばかりの呆れた表情を浮かべている。

「なんでみんな同じ反応なんだよ……。ヘコむぜ」

「すいません。普通の騎士団の方かと思ってつい……」

「あー気にしないでいいから。みんな同じ反応だからな」

男は笑った。アシュレイも無理矢理、笑顔を作って返した。

「申し遅れたが俺は剣術科のエッジだ。兄ちゃんは？」

「アシュレイです」

「アシュレイか。よろしくな！」

エッジに求められるがまま、アシュレイは握手を交わした。

この時、列車はようやくハッシュヤードを出たところだった。

「アシュレイはどの科に志願したんだ？」

「剣術科です」

「おつ、一緒か。こんな剣を振り回したいか？」

エッジは今まで自分にもたれかけていた剣をアシュレイの方へ倒した。この剣を受け止めた瞬間、アシュレイは思った。

これは無理だ。と。

一般的な人間には到底扱えない重さで、受け止めることもままならない。

「うわっ、重たいですね。さすがにこれは……」

剣に振り回されるような思いをしたアシュレイは渾身の力を込めてエッジに剣を返した。それでも剣はギリギリ、エッジの方へ傾いただけである。

「ハッハッハ。そうだろ？ でも、俺にとっちゃこいつは相棒だ。

これだけ重たい分、こいつが繰り出す一撃は普通の剣で100回斬っても崩せないようなものすら玉砕させる」

エッジは自分の方に倒れる剣を軽々と受け止めて言った。

アシュレイはエッジがレイウス学園の学生ということと心不安がさらに増えた。こんな超人的な人ばかり集まっているのかなと……。

期待と不安のレイウス学園

「ん……」

「起きたか？」

時計を見るとすっかり時も経ち、列車に乗ってからもう6時間も経過していた。太陽はすっかり天高く上り、地上を照らす光となっている。

アシュレイはエッジと会話を交わすうちに、朝が早かったからか睡魔に襲われいつの間にか眠りについていた。

長い間、一定の姿勢を保っていたからか全身が硬直しているのが分かる。動かそうとすると、身体の節々が痛む。

それでもアシュレイは身体は極力動かさず、首だけを左に向けて窓の外を眺めた。

見たことの無いドーム状の建物や列車内からは高さが計り知れない塔のような建物がいくつも並び、その隙間を縫うように列車が走っている。そこには自然のしの字も存在しないほど造形物で埋め尽くされていた。

「うわ、この建物どれだけ高いんだ。倒れないのか？」

「おいおい、心配しなくても倒れないぜ。これらのほとんどはお隣のサランド大陸のテクノロジーだからな」

「へえー……」

アシュレイにはエッジの説明など届いていなかった。自分から質問しているのに、回答そっちのけで窓の外に釘付けになっている。

今まで田舎暮らしだったから全てが新鮮で、まるで別世界にいるような感覚をアシュレイは味わっていた。

「アシユレイ。あそこに見えるのがレイウス学園だ」エッジは学園が見えたタイミングでアシユレイに指をさして教えた。

「どれどれ……。えっ、あれ!？」

「ああ。お城みたいだろ？」

アシユレイが見たのは山の壁際に建てられた真っ白な建物だった。広大な敷地を有し、いくつもの小屋やグラウンド、そして中央には円形で渦巻く塔のような建物。

それらをまとめて表現すると、本当にお城としか言いようがない。これはお城じゃないのかと勘違いまで起こしそうな勢いだ。

アシユレイ自身、城の風貌は本で見てイメージしていたがそのままだったので余計に驚き、疑ったのだ。

「まあ、世界各地から武術や魔術を学びに人がやって来るから、そう考えるとあの規模は妥当なんじゃないかと思うけどな」

「確かに、言われてみればそうですね」

「ただ巨大なことには変わりはないから毎年、8割の新生は迷子になるぞ」

「自分も迷子になりそうです」アシユレイは苦笑いをした。

「大丈夫だ。一通りは俺が教えてやるよ」

「あ、ありがとうございます」

アシユレイは頭を下げた。頼もしい限りである。

まだ駅に着かないのかとワクワクしながら、硬い身体を持ち上げて背伸びをすると間接という間接がバキバキと鳴った。

痛みはあるが、それ以上に好奇心がくすぶる。少し、おぼつかない足取りながらも列車の入り口に立った。

後は開くだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6021p/>

Demon Slayer

2010年12月30日21時45分発行